

太宰治学びの家 訪問

「懐かしい匂い」

佐々木宏一

住居は、時代のタイムカプセルです。

私のような昭和二十年代に生れた人間にとって、「太宰治学びの家」と称される藤田邸は、建物の佇まいといい、一歩内に足を踏み入れた瞬間の感覚といい、どこかタイムスリップしたような気分にさせてくれます。

玄関から続く、現在は見学者の沓脱になっている土間は、それ自体が子供の頃の記憶に繋がります。私の生まれた町にも、旧い家には、裏手に通じる「通り土間」があり、地面を固く叩いただけの廊下兼通路になっていました。小学校の低学年まで、夏休みになると、開けっ放しの入口から裏口へ、土間を吹き抜ける風に追われるように、鬼ごっこをして駆け回っていた思い出があります。

それから、土間と座敷の位置についても、かなりの高低差があったのだと、藤田邸を見てあらためて思いました。そうしてみると、身の丈の低い子供にとって、座敷と土間

の上がり下りはとても難儀なものでした。

その土間の左手は、学びの家の解説をしてくれる方の部屋です。日曜日には、私の大学時代からの畏友である瀬川紀雄氏が詰めていますので、時々立ち寄って四方山話をすることもあります。夏など、窓から侵入した風が、通り土間を軽々と乗り越え、文学講座の会場になっている広間をさっと過ぎて、広く開け放した縁側から、深緑の植栽が眩しい日盛りの屋外に抜けて行きます。そんな時、ふっと、「はつなつのかぜとなりたや」の詩を連想してしまいます。いったい、風のななが、私にそんな思いを起させるのでしょうか。

きっと、吹き迷ってこの屋に入り込んだ風が、この家の帯びている時代に染まり、私に、とても懐かしい匂いを残して行ったからに違いありません。